都市・農村 11

西三条第跡出土の遺物 5
木製品

http://www.kyoto-arc.or.jp
（公財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに　ここでは平安京右京三条一坊六町跡（藤原良相邸、西三条第推定地）の池から出土した木製品を紹介します。平安京では、木製品の残りが悪いため、９世紀後半に属するこれらの木製品は、当時の生活様式をうかがう貴重な遺物といえます。

木簡１　長さ 20.6cm の細長い板材の両面に墨書があります。表面の７文字は、漢字の崩し方からみて仮名文字とみられます。

木簡２　折敷の底板に２列以上の墨書があり、左列には「酒」と糸偏をもつ漢字が書かれていたと想定されます。容器の中身を記していたのではないでしょうか。

櫛　現在の横櫛とほとんど同じ形態の櫛が 10 数点出土しています。大きさから４種類以上に分類でき、写真の１番上が最小、次が２番目、下の２つが大型に属します。歯と背の境に引かれた横方向の直線は、鋸で歯を挽き出す際の目印とみられます。歯の間隔は、大型で１cm 当り約 10 本です。

檜扇（ひおうぎ）　紙貼りの扇（蝙蝠扇（こうもりせん））が普及する以前に使用された扇です。一般的には上端の両側には板（橋（ほね））と呼ぶ）を綴じるための小孔が穿（うが）たれますが、写真の檜扇には綴孔（とじあな）は確認できません。４種類に分類できるため、階層・年齢・性別などで違いがあったと思われます。

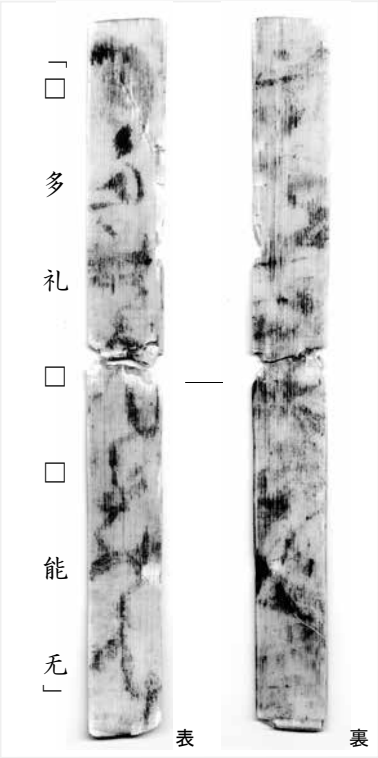
ヘラ状製品　一方の先を尖らせた板状製品で、形状からみてヘラとして使用されたと考えます。

串状製品　ヘラ状製品より先が鋭く尖った製品です。用途は特定できませんが、同じく工具の一種とみられます。

浮子（うき）　両側を尖らせた棒状の製品で漁労具の一種とされています。写真の左は完存品です。

弓　先端は両側から削り込んで薄く加工されており、弯曲具合から弓の端部とみられます。

調度品　左は角材の上端を細く削り出し、下には２方向の穴が穿たれます。上端を別の部材に差し込み、下にも直角方向の部材が差し込まれたとすると、机か椅子の脚部と推定されます。右は上面が削り込まれ、そこを別の個体に嵌（は）め込んだと推定される個体です。下面は波状に加工されており、装



木簡１　長さ 20.6cm（赤外線写真）

木簡２　上下の幅 7.5cm（赤外線写真）

櫛
上下の幅は上から 1.4cm、2.0cm、3.8cm、4.2cm

檜扇　長さ 33.5cm

飾性の高い調度品の一部とみられます。

下駄　現在の下駄とほぼ同じ形で、成人用とするとかなり小型です。完存品ですが、底の歯は相当磨り減っています。

舟形　中央を刳りぬき舟状に加工した製品で、舟の形代（かたしろ）として作られた祭祀具です。

車輪形　曲物底板の中心に円孔が穿たれ、縁の輪郭と中心から放射状に延びる線が墨で描かれています。牛車などの車輪を表現した祭祀具の一種です。

折敷（おしき）　隅丸長方形の底板と、その上の側板が残存します。側板は長辺側のみにあり、短辺側には綴孔も認められません。

その他　角材、板材、棒状を呈するものが出土していますが、用途は特定できません。

まとめ　木製品が多く出土した中にあって、木簡の出土は２点に留まりました。その背景として紙が普及しつつあったためと考えられます。

調度品として紹介した２点は、机や椅子などの一部とみられます。ヘラ状・串状を呈する製品は工具であり、邸宅内で製品を加工・修繕する部署があったことが想定されます。

櫛と檜扇については、出土数が多いことと、様々な大きさの製品が含まれることが注目されます。特に小型の製品は女性や子供が使用したことが想定でき、藤原良相一族の私的な生活様式を示す貴重な遺物といえましょう。

（丸川義広）

ヘラ状製品
左の３本は長さ約 15cm

串状製品
３本とも上部欠損、中央の長さ 9.3cm

浮子
左は長さ 7.2cm

弓
長さ 13.5cm

調度品
左は長さ 19.2cm、右は長さ 8.3cm

下駄　長さ 21.2cm

舟形
長さ 19.6cm

車輪形　直径 10.0cm

折敷　長さ 46.1cm